

氏 名(国 籍) ^も牟 ^せ世 ^{じよん}鐘 (韓 国)

学 位 の 種 類 博 士 (言 語 学)

学 位 記 番 号 博 甲 第 1,313 号

学 位 授 与 年 月 日 平 成 7 年 3 月 23 日

学 位 授 与 の 要 件 学 位 規 則 第 5 条 第 1 項 該 当

審 査 研 究 科 文 芸 ・ 言 語 研 究 科

学 位 論 文 題 目 時 の 表 現 — そ の 形 式 と 意 味

主 査 筑波大学教授 文学博士 北 原 保 雄

副 査 筑波大学教授 Ph. D. 草 薙 裕

副 査 筑波大学教授 林 史 典

副 査 筑波大学講師 矢 澤 真 人

副 査 東京大学教授 Ph. D. 角 田 太 作

論 文 の 要 旨

本論文は、日本語の時の表現を総合的に解釈することを試みたものである。

従来、時に関わる表現は、アスペクトとテンスという二つのカテゴリーの中で説明されてきた。現代日本語についても、テンスは「ル」形と「タ」形の対立から、アスペクトは「ル」形と「テイル」形の対立から解釈されてきた。しかし、「タ」形に、過去ではなく現在を示す用法や、完了・存続といったアスペクト的な意味を表す用法があるなど、この形態的な対立が必ずしも意味的な対立と対応しない例があることも従来指摘されてきたことである。本論文は、これら、従来例外として扱われてきた現象や等閑視されてきた現象について詳細に検討し、統一的な視座から考察を加えることによって、「時の表現」の総合的な解釈を試みたものである。

本論文は、次の九章から構成されている。

第一章 はじめに

第二章 「時の表現」の決定要素

第三章 事象間における時間関係の表現形式

第四章 状態の表現における「ル」形と「タ」形

第五章 動きの成立の表現における「ル」形と「タ」形—現在の表現と関連して—

第六章 現在の表現と「シテイル」の意味

第七章 動き動詞における「ル」形と現在

第八章 状態動詞における現在の表現形式—その意味と制約—

第九章 おわりに

第一章では、「時の表現」に関わる従来の主要な見解を示し、それに検討を加えるとともに、「時の表現」に関わる問題点や本論文の立場や構成について説明する。

第二章では、「時の表現」を決定する要素とその枠組みを示す。

「時の表現」は、時間軸上に位置づけられる「事象」の時点的な対立を表すものであり、それには、継続している状態が過去であるのか現在であるのかを表す「状態の表現」と、動きがすでに成立したかこれから成立するかを表す「動きの成立の表現」との二種類があり、形態的な「タ」形と「ル」形の対立は、発話時点を基準とする限りにおいては、前者では過去と現在を、後者では過去と未来を表すことなどについて論じ、次のような枠組みを提示する。

事象の種類	時の表現の決定	形式の意味	
状態	状態の存在時	シタ（過去）	スル（現在）
	状態が捉えられる時点	発話時以前の状態	発話時の状態
動きの成立	動きの成立時	シタ（過去）	スル（未来）
	動きが成立する時点	成立した動き	成立する動き

第三章から第八章においては、従来の研究で例外的なものとして処理された現象や度外視されてきた現象について検討し、「時の表現」の形式と意味との関連について考察を進める。

第三章では、二つ以上の事象の継起性と同時性が事象の種類に深く関わることを論じる。(1)の二つの事象は同時と捉えられ、(2)の事象は継起的に捉えられる。これを事象の性質と表現形式から分析し、この継起性と同時性は、「スル」「シタ」「シテイル」といった表現形式とではなく、「動きの成立」と「状態」という事象の内容と密接に関わることを論証する。

(1) 電話をしていた。友達が来た。

(2) 電話をした。友達が来た。

第四章では、(3)のような状態表現や(4)(5)のような「発見」「思い出し」の「ル」形と「タ」形の意味とその近似性について考察を加える。ここで、「タ」形の状態の表現が現在時の状態に対して非明示的であること、逆に「ル」形の状態の表現が過去の状態に対して非明示的であることを示し、このような現象も「時の表現」の例外ではないことを論じる。

(3) この習慣は昔からある。 ↔ この習慣は昔からあった。

(4) あ、見つかった。ここにある。 ↔ あ、見つかった。ここにあった。

(5) あ、彼の誕生日は明後日だ。 ↔ あ、彼の誕生日は明後日だった。

第五章では、(6)のような、実況放送にしばしば現れる、動きの成立する瞬間を捉えているように見える「ル」形や、(7)のような遂行動詞の「ル」形について、「タ」形も関連させて取り上げる。動きの成立を表す「ル」形は一般的に現在を表さないものであり、前者のような発話と動きの成立が同時に見える「ル形」も遂行動詞の「ル」形も瞬間的な現在を表すものではなく、「時の表現」の例外とはいえないことを論じる。

(6) 投手、投げます、投げました。

(7) よろしくお願いする。

第六章では、「シテイル」の意味と現在の表現との関わりについて論じ、「シテイル」によって表されるアスペクト的な意味を「時の表現」の枠組みから分析し、位置づけることを試みる。「シテイル」が表すのは、唯一「動きの成立とその結果から捉えられる状態」であること、従来論じられてきた「シテイル」の種々の意味はこの「状態」の下位分類にすぎず、「時の表現」の体系の中で論じられるものではないこと、「時の表現」としては、「イル」と「イタ」によって示される、状態の「ル」と「タ」の対立として一般化できることを論じる。

第七章では、(8)(9)のような習慣・規則・真理などを表す文を取り上げ、動きの成立を表す動詞の「ル」形と現在の表現との関わりを論じる。これらの文が表すとされる「恒常性」についてや、(10)のような「スル」と「シテイル」との置き換えについて検討を加え、このような表現は、語彙的に動き動詞であるものが副詞などによって「状態化」したことから生じる、状態の現在の表現であることを示す。

(8) 私は朝早く起きる。

(9) 溺れるものは藁をも掴む。

(10) 私は朝早く起きている。

第八章では、現在の表現に、(11)(12)のように「シテイル」だけを用いる表現、(13)のように「スル」や「シテイル」を用いる表現、(14)のように「スル」「シタ」「シテイル」を用いる表現について、それぞれの意味と用法の制約について検討を加える。特に心的活動や感覚・感情活動の動詞と「時の表現」との関わりについて論じるとともに、(12)と(13)のような「ガしている」と「ヲしている」の表現には主観・客観の別のあること、状態表現の現在の表現形式は多様であるが、そこには規則性が存在することなどを指摘している。

(11) 学校の後ろにはきれいな山がそびえている。

(12) 学生が被る帽子は黄色い色をしている。(*黄色い色をする)

(13) a この香水はいい匂いがする。

b この香水はいい匂いがしている。

(14) a これは疲れるな。

b 彼は最近仕事で疲れている。

c 今日は本当に疲れた。

第九章は全体を総括し、本論文の主たる主張をまとめて示している。

審 査 の 要 旨

本論文は、「事象」を状態と動きの成立の二つに分け、時に関わる表現を、状態という面を時間軸に位置づけるものと動きの成立という面を時間軸に位置づけるものとに二分するという考えを提示したところに、第一の、そして最大の功績がある。

事象を二つに分けて考えることにより、(1)なぜ、同じ現在の表現に「ル」形と「タ」形の両方が用いられるのか、(2)なぜ、発見や思い出しの表現に「タ」形が用いられるのか、(3)習慣・規則・心理などを表す文では、動きの成立を表す動詞の「ル」形が現在の表現になるが、それはなぜか、などを始め、多くの問題が無理なく説明される。

従来のテンス・アスペクトというカテゴリーによる研究では、いずれも解決することができず、例外的なものとして扱われてきた問題である。これら、多くの具体的な問題を解明したことが、本論文の第二の功績である。本論文によって提示された、新しい解釈、新しい発見は、きわめて多い。

本論文は、構成も整っており、各章において一つ一つの問題を徹底的に究明しようとしている点も高く評価できる。ただそれだけに、やや強引に自説に導こうとした部分も認められ、論述に繰り返しの多いことも気になる。また、著者自身も認めているように、現在を表す表現についての考察が中心で、過去や未来を表す表現についての考察が不十分である。文末の表現に考察が限られており、文中の表現についての検討は行われていない。こういう点が改められ、あるいは付加されれば、本論文はより優れた完全なものになるであろう。しかし、これらの点は、本論文の論旨にいささかもかわるものではなく、決定的な瑕疵にはならない。本論文において提示された、時の表現の捉え方と、それに基づいた具体的な考察とは、高く評価されるべきである。

よって、著者は博士（言語学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。